

Title	【定年退職教授の履歴および主要業績】 中川敏教授
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2019, 45, p. 189-193
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71842
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【定年退職教授の履歴および主要業績】

中 川 敏 教授

なか がわ さとし
中 川 敏 教授

- 1978年4月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専門課程第1種博士課程進学
 1979年3月 昭和53年度アジア諸国派遣留学生としてインドネシア大学に留学
 1982年4月 オーストラリア国立大学太平洋問題研究所人類学科博士課程留学
 1984年3月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専門課程第1種博士課程退学
 1984年10月 京都大学東南アジア研究センター助手
 1989年4月 大阪国際大学経営情報学部経営情報学科講師
 1990年4月 オーストラリア国立大学より哲学博士(Ph.D.)学位取得(1990-04-19)
 1990年4月 大阪国際大学助教授
 1996年4月 同教授
 1997年4月 大阪大学人間科学部助教授
 1999年6月 同教授
 2019年4月 大阪大学名誉教授(予定)

中川敏教授は1978年東京大学大学院社会学研究科修士課程を終了し、同年博士課程に進学した。翌年文部省アジア諸国派遣留学生としてインドネシア共和国に派遣され、同国のフローレス島中央部エンデでの2年間の人類的調査を行なった。1982年にオーストラリア国立大学太平洋問題研究所の人類学博士課程に進学し、1990年に同大学より博士号を授与された。オーストラリア留学中に京都大学東南アジア研究センター助手に任命され1984年に帰国し、同大学に着任。その後1989年に大阪国際大学、つづけて1997年に大阪大学人間科学部に着任した。2019年3月31日限りで定年退職するものである。

この間中川教授は長年にわたり人間科学部・大学院人間科学研究科の学術的発展と学生教育に貢献した。同教授は、人類学者として理論人類学と東インドネシアの民族誌の二つの分野において多大な貢献をした。1979年より2年間行なった東インドネシア、フローレス島中央部のエンデ人の社会構造についての調査はオーストラリア国立大学への博士論文に結実した。エンデの日常の隅々まで支配している贈与交換のメカニズムを、構造主義の手法を用いて分析した。集団形成を社会学的視点から見るのではなく、説明論的視点から見るという画期的な切り口からエンデの贈与交換および親族組織を詳細に分析した。

博士論文では背景にあった分析哲学の考え方がこの後前面に出されるようになった。1992年に刊行された『異文化の語り方』においては、ウイトゲンシュタインおよびアンスコム由来の分析哲学がいかに人類学的思考と親和的かについて述べられる。分析哲学を駆使した民族誌として『交換の民族誌』が同時に刊行された。その後、いくつかの論考で中川教授は人類学への分析哲学導入の可能性をさぐってきた。それは規約と解釈、言語ゲーム、アスペクト把握な

どの概念へと収斂していく。「科学」を対象としながらそれらの概念を使用した習作が『言語ゲームが世界を創る』（2009年）である。その後、中川教授は対象を芸術にまで広げながら、われわれの人生に対する態度を芸術への態度と重ねあわせる。一つの成果が2017年に刊行された論文「嘘の美学」である。

2017年度、中川教授は「文化人類学を自然化する」という研究会（国立民族学博物館）を立ち上げ、社会心理学者、哲学者、自然科学者をメンバーとして招待して、「文化人類学を自然化する」方向性を、現在模索しつつある。

フローレス島エンデにおける調査は、その後も継続して行なわれている。じっさい中川教授はほぼ毎年エンデに渡航している。40年にわたり一つの共同体を見続けている調査はたいへんに珍しく、中川教授と調査地の人びととの緊密なラポールをしのばせる。中川教授はすでにいくつものエンデの民族誌を刊行しており、東インドネシアそしてオーストロネシア語族の比較民族誌という文脈での大きな貢献をなしてきた。

2013年には中川教授自らが代表者となる科学研究費「東ティモールのナショナリズムの人類学的研究」のもと、ティモール・レステ共和国での調査を開始した。5年間の研究期間が終わり、2017年11月には中之島センターで国際カンファレンスを開催した。このカンファレンスの成果は、現在国立民族学博物館刊行の『国立民族学博物館研究報告』特集号として準備が進んでいる。

中川教授は調査の現地への還元も積極的に行なっている。ティモール・レステにおいては、NGOを中心とする地元の人々に向けて報告会を開催している。インドネシアではジャカルタの国立インドネシア大学、エンデのフローレス大学で講演をおこなっている。

中川教授は1997年4月に大阪大学人間科学研究科基礎人間科学講座に着任以来、文化人類学分野の中心教員として活躍し、共通教育における全学向けの授業科目、学部の「理論人類学」などの講義科目、また文化人類学の演習および実験実習科目を担当し、多数の学部生の卒業論文指導にあたってきた。大学院においては、これまでに多くの大学院生の指導にあたり、優れた社会人および研究者を輩出してきた。中川教授を主査として博士号を取得した学生は15名を超えている。

中川教授は本学、および本研究科の国際交流の分野で活躍された。全学レベルの留学生委員、国際交流委員を長くつとめ、本学の留学生に対する施策、国際交流の基本について深く関わった。また教授会を設けたばかりの留学生センター（現国際教育交流センター）の教授会構成メンバーとなり、留学生センターの発展にも尽した。その後、人間科学研究科のできたばかりの国際交流室の二代目の室長となった。中川教授は室長を長くつとめ、人間科学研究科の国際交流の基本的な方針を打ち立てた。

中川教授は所属する日本文化人類学会（改称前は「日本民族学会」）においては長く情報化委員をつとめている。また2010年からは理事として学会誌『文化人類学』の第24期編集長をつとめた。

以上のように中川敏教授は、人間科学の学術的発展とその教育、また大阪大学と人間科学

研究科の組織管理運営に尽くされている。

主 要 業 績

著書

1. 中川敏『言語ゲームが世界を創る』世界思想社 2009 年
2. 中川敏『交換の民族誌－犬好きのための人類学入門』世界思想社 1992 年
3. 中川敏『異文化の語り方－猫好きのための人類学入門』世界思想社 1992 年

他 1 冊

学術論文

1. 中川敏「嘘の美学－異文化を理解するとはどういうことか」『社会人類学年報』第 43 巻, 2017 年
2. 中川敏「コスモスからピュシスへ－人類学的近代論の試み」『文化人類学』第 72 巻, 2008 年
3. 中川敏「人類学の正義と正義の人類学」杉島敬志編『人類学的実践の再構築－ポストコロニアル転回以後』世界思想社, 2001 年
4. 中川敏「生活の形式」野家啓一編『ワイトゲンシュタインの知 88』新書館, 1999 年

他 31 報